

アメリカに渡った掛物絵

— 万延元年遣米使節贈答品 —

Hanging Scrolls for the United States: Gifts of the 1860 Japanese Embassy

山田 久美子
YAMADA Kumiko



狩野友信、狩野中信、万延元年遣米使節、ブキャナン
Kano Tomonobu, Kano Nakanobu, 1860 Japanese Embassy, Buchanan

Abstract

KANO SHUNSEN TOMONOBU (1843-1912) was commissioned in 1859, as court painter in the last days of the Tokugawa shogunate, 15 hanging scrolls to send to the USA and to Britain. He was granted a set of seasonal costumes and 50 silver coins in addition to his yearly wages, according to his records as associate professor at the Tokyo School of Fine Arts. Tomonobu, whose major works include “The Battle of Heiji” (Tokyo National Museum), “Mandarin Ducks on a Fallen Tree” (University Art Museum, Tokyo National University of Fine Arts and Music), “Winter Landscape” and “Flowers on a Lacquer Plate” (Museum of Fine Arts, Boston), “Landscape” (Philadelphia Museum of Art), “Floral Arrangements” (The State Hermitage Museum, St. Petersburg), and several others in private collections, is known for his association with Ernest F. Fenollosa who arrived in Japan after the Meiji Restoration and advocated traditional Japanese arts. The 15 hanging scrolls commissioned as gifts of the newly opened nation would have had a special meaning to the artist who sought to preserve the tradition of Kano school painting during the rapid westernization. This paper seeks to investigate the fate of these hanging scrolls, some of which were presumably sent with the first Japanese Embassy to the United States in 1860.

1. はじめに

東京美術学校助教授をつとめた狩野春川友信（1843-1912）は徳川幕府の奥絵師として将軍家茂により任用された1859年（安政6）に、英米両国へ送付する掛物絵15幅の制作を申し付けられている。それらの掛物は、翌1860年2月9日（万延元年正月十八日）¹⁾に品川から出航してアメリカに向かった幕府の最初の海外使節団、新見豊前守一行に託された可能性がある。ペリーが黒船で渡来した1853年（嘉永6）に狩野派の画塾である木挽町絵所に入った友信は、以来7年間絵画修行に励み、16歳で幕府に召し出されて、二十人扶持の奥絵師となった。江戸城本丸の杉戸絵10枚、屏風5双、掛物3幅、和宮を迎える待受調度品として屏風1双、掛物2幅、ほかに西の丸の杉戸絵15枚、小襖2通などを制作している²⁾。現存する友信の作品のひとつに「武者図屏風」がある（図1）³⁾。

友信はまた奥絵師でありながら1863年（文久3）には幕府の命により開成所に入学して二年間洋画を修行し、翌年より川上冬崖（1827-1881）に三年間、チャールズ・ワーグマン（1832-1891）に二年間師事し、洋画を学んでいる⁴⁾。旧幕臣ながら1870年（明治3）には新政府に出仕して、開成学校、東京大学理学部、東京大学予備門で画学を教えることになった背景には、幕末の洋画修行があると考えられよう。開成学校の画学教科書『図法階梯』（1872）、東京大学予備門の画学教科書『習画自在』（1884）の共編者に名前はあるものの、友信の洋画で現存するものは確認されていない。狩野派絵画を教えるには1889年（明治22）の東京美術学校開校を待たねばならなかった。友信の日本画は東京藝術大学美術館、東京国立博物館など国内の美術館および個人所蔵品のほかに、アーネスト・F・フェノロサ（1853-1908）、ウィリアム・S・ビゲロウ（1850-1926）らによってボストン美術館、フィラデルフィア美術館などにも納められている。だが東京藝術大学に伝わる履歴書に記されている奥絵師としての最初の仕事、幕末に英米両国への贈答品として海を渡った掛物絵こそ友信の原点であったといえるかもしれない。この15幅の行方を探ることが本研究の目的である。

2. 幕府海外贈答品

1854年（安政1）の日米和親条約締結により鎖国政策の見直しを迫られた徳川幕府は米・蘭・露・英・仏の5カ国と1858年（安政5）に仮の通商条約を結び、使節を交換することになって、にわかに外交の舞台に登場した。鎖国中にも朝鮮・琉球との通信、オランダ・中国との通商は認められており、国書に添えて屏風、掛物などの美術工芸品や絹織物などが贈られた。唯一国交上の正式使節として来日した朝鮮国王の派遣使節は1636年（寛永13）度以降「朝鮮通信使」と呼ばれるようになり、幕府は最大級の賓客としてもてなし、朝鮮国王に贈呈する屏風絵を託している。1607年（慶長12）の第1回から1811年（文化8）の最終回まで、主として将軍襲職祝賀のために計12回にわたって来日した朝鮮通信使には、第4回以降は豪華な金地を中心とした六

曲屏風が毎回 20 双贈呈され、総計 190 双の屏風が朝鮮に渡ったとされる。武者絵、物語絵、花鳥図、名所絵などこれら屏風の制作は幕府御用絵師の重要な任務となった。最後の朝鮮通信使を迎えた 1811 年（文化 8）には、木挽町狩野家の伊川院栄信が二双、浜町狩野家の融川寛信が一双、中橋狩野家の祐清邦信が一双、鍛冶橋狩野家の探信守信が一双を制作、その他の絵師たちとあわせて計 10 双分が準備されたといわれるが、いずれも所在不明である。

一方、オランダのライデン国立民俗学博物館にはヤン・コック・ブロンホフ（1779-1853）、ファン・オフエルメール・フィッセル（1800-1848）、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796-1866）ら長崎出島オランダ商館関係者の日本美術工芸品コレクションとともに、1856 年（安政 3）徳川幕府からオランダ国王に贈られた金地屏風 10 双が所蔵されている。オランダから蒸気船スームピング号が寄贈されたことに対する返礼として、鎧、胴具足、翠簾屏風、扇子などとともに国王ウィレム三世のもとに届けられた。1845 年（弘化 2）にはオランダ国王ウィレム二世（在位 1840-49）から將軍宛に鎖国政策の見直しを勧める親書が届けられたのに対して、老中連名による丁寧な返書が送られ、目録に金地屏風への言及がある。奥絵師の住吉内記弘貫は同年オランダ国王への贈り物として「花鳥図屏風」一双を制作し幕府に納めている（榭原 265）。

ライデン国立民俗学博物館所蔵の 1856 年（安政 3）のいわゆる贈蘭屏風のひとつに、友信の父である狩野董川かのうとうせんなかのぶ中信（1811-71）の「賀茂競馬かものからべうます図屏風」がある。京都上賀茂わげいかずち別雷神社に伝わる年中行事、賀茂競馬は 1093 年（寛治 7）に始まり、一時廃れたものの徳川時代に再興され、現在も 5 月 5 日に行われている神事である。右隻には一頭ずつ走る「空走そらばしり」の場面が遠景の上賀茂神社の社殿と御手洗川とともに、左隻には左右二頭が競う本番が御手洗川を背景に描かれている（図 2）⁵⁾。両隻に「狩野式部卿法眼藤原中信筆」という落款があるが、浜町狩野家第 8 代で 1844 年（弘化 1）法眼に叙せられた中信は、1856 年には贈蘭屏風制作のとりまとめ役である絵事御用頭取をつとめ、当時の狩野派を代表する奥絵師であった。幕府外交の一翼を担う屏風の制作は、奥絵師にとって重要な任務であったに違いない。2007 年にサントリー美術館および大阪市立美術館で開催された「BIOMBO / 屏風 日本の美」展では、1748 年（寛延 1）第 10 回朝鮮通信使に託された屏風絵のうち韓国国立古宮博物館所蔵、狩野友甫宴信筆「苺田雁秋草図屏風」1 双、ならびに 1856 年（安政 3）にオランダ国王に贈られた屏風のうち、狩野董川中信筆「賀茂競馬図屏風」、狩野勝川院雅信筆「鷹狩図屏風」、狩野探原守経筆「富士巻狩図屏風」、住吉内記弘貫筆「太平記図屏風」、板谷桂舟弘延筆「宇治製茶図屏風」、狩野春貞房信筆「四季耕作図屏風」、狩野永憲立信筆「武者図屏風」、狩野休清実信筆「墨梅図屏風」、狩野雪溪俊信筆「野馬図屏風」、狩野素川寿信筆「墨松図屏風」の計 10 双が里帰りした。いずれも高さ 160 センチ幅 356 センチ余、金箔、金砂子などが施された最上等の造りであり、朝鮮およびオランダ国王に贈られた屏風の多くが同様の豪華な金屏風であったことが推定されよう。

板谷桂舟弘延筆「奥御用日記」には 1859 年（安政 6）に屏風一双をイギリス国王に贈ったこと、同じく命を受けた絵師として狩野永憲立信、狩野探原守経、住吉内記弘貫の名前があがっているが、狩野董川中信の名前はない。以降、中信の名前は登場せず、同年 12 月 12 日に友信が奥

絵師に任用される。またこのときの贈英屏風作者の一人、狩野探原守経の年譜には「英吉利国江遣さる御屏風御絵御用相勤、同垂米利加国江遣さる御掛物御絵御用相勤、御褒美頂戴仕候」（河野 260）とあるが、英国へ屏風を、米国へ掛物を贈るというのは、幕府として国王に対する贈答品と大統領に対するものとは差をつけたということであろうか。守経の年譜には「御褒美」と記載されているが、友信の履歴書では掛物絵 15 幅に対する御褒美が銀貨 50 枚と時服一重であったと具体的に記載されている⁶⁾。

3. ペリーの持ち帰った贈り物

幕府が新たな通商の相手国に贈った美術工芸品としては、まずアメリカ海軍のマシュー・C・ペリー提督（1794-1858）に贈られたものがあげられよう。アメリカ国立自然史博物館所蔵のペリー遠征隊由来とされる日本および琉球の民俗学資料は 255 点に及ぶものの、主として民具であり、幕府からの贈り物と推定されるような美術工芸品の数は少ない。ペリーは来日当時、自然史博物館の前身である合衆国々立博物館 (United States National Museum) への収蔵を念頭に、精力的に日本の民俗学資料を集めたとされる (Houchins 3)。

これとは別に大統領官邸ホワイトハウスには、ペリーが日本から持ち帰ったと日記に記している「蒔絵書棚」(gold lacquered bookcase) (図 3) ならびに「蒔絵文机」(lacquered writing table) (図 4) とされる漆器 2 点が現存する⁷⁾。万延元年遣米使節が大統領「謁見」のためにホワイトハウスを訪問した際に正副使の控え室となった「ブルールーム」に飾られていたのはこれに類するものであろうか。副使村垣淡路守の「航海日記」に次の記述がある。

「おのれらが席は楕円の形にして、七間に四間もあるべし。花やかなる藍もて文を出せし敷物。前に三口、玻璃の障子にして内に戸張を掛け、これも同じ色の織物なり。四方に大なる玻璃鏡を掲げ、前に卓をおき、わが国の蒔絵の料紙・硯・その他さまざまかざりてあり。こはペルリ渡来の時、遣わされし物と聞こゆ。 (村垣 118)

遠来の客をもてなす為にペリーの持ち帰った品々が飾られたようである。スミソニアン協会の国立自然史博物館にはペリー遠征隊由来とされる「梨子地蒔絵料紙箱」があるが、これは 1854 年 3 月に神奈川で幕府からアメリカ大統領宛に贈られたものである (Houchins 20)。万延元年の使節団一行は後日、ペリーの未亡人をニューヨークの自宅に訪問し歓待されている。

4. 万延元年遣米使節の贈り物

狩野友信の掛物絵がアメリカに送られた可能性のある万延元年遣米使節の任務は、第一に日米修好通商条約批准書交換であった。周到に準備が進められ、贈り物については新見豊前守ら三使

節連名による「大統領へ被下物取調相伺候書付」が外国奉行水野筑後守に提出され、その中に次の物品が挙げられている（維新学会 153）。

物品書	
拵付太刀	二振
馬具	一揃
掛物	十幅
錦戸帳	五垂
翠簾屏風	五雙
漆器類	
大和錦	十巻

おそらくこれが幕府として準備したアメリカ合衆国大統領への贈り物であろう。注目すべきはこの中に金地屏風はないということである。掛物の内五幅は極彩色、五幅は墨画山水、美しい装丁と指定されている⁸⁾。漆器については蒔絵書棚および梨子地蒔絵料紙硯箱となっている⁹⁾。念入りに誂えられたこれらの贈り物は使節団とともにアメリカに向けて出発した。正使新見豊前守正興 40 歳、副使村垣淡路守範正 48 歳、監察小栗豊後守忠順 32 歳の 3 名率いる遣米使節団一行は、出迎いの米国軍艦ポーハタン号に乗り込み、ハワイ経由サンフランシスコまで航行し、パナマから汽車に乗り換えて大西洋側アスピンワールで出迎いの軍艦ローノック号に乗船し、1860 年 5 月 10 日（万延元年閏 3 月 24 日）にフィラデルフィアに到着、国務省のヘンリー・レッドヤードならびに海軍のサミュエル・F・デュポン大佐をはじめとする歓迎委員会面々の盛大な出迎えを受けた。翌日にはフィラデルフィアを出港して、ポトマック川を上り、途中初代大統領ジョージ・ワシントンの墓のあるマウント・ヴァーノンに詣で、首都ワシントンの海軍工廠に上陸した。そこからは美しく飾られた四頭立て馬車二台に分乗した三使節を中心に隊列を組み、ホワイトハウス近くのウィラード・ホテルに向かう一行を大勢の群衆が見守った。特に日本側の条約批准書が入った大型の木箱は人足によって担がれ、行く先々で話題になったという。使節団は第 15 代大統領ジェイムズ・ブキャナンの「謁見」を前にして、駐米公使タウンゼンド・ハリスが将軍に謁見した際の儀礼を参考に、それよりも一步もへりくだることなく振る舞うため、滞在中のウィラード・ホテルで予行演習を行い、万全を期して臨んだという。

遠い日本から来た使節団はこの頃アメリカで次々と創刊された挿絵入り新聞に恰好の話題を提供したかたちになった。ホワイトハウス近くにスタジオを構えていた写真家マシュー・ブレイディ（1822?-1896）は使節団の公式記録ならびに肖像写真を撮影しているが、ウィラード・ホテルで報道陣に公開された日本からの贈り物を撮影している。このときのブレイディの写真は所在不明であるが、ブレイディが撮影する様子、『フランク・レズリー絵入新聞』（*Frank Leslie's Illustrated Newspaper*）の報道画家が贈り物をスケッチする様子を伝える挿絵が残っている（図

5)。幕府の記録にある「拵付太刀」「馬具（鞍）」「書棚」と思われる品々が左側の壁際に見える。その前の絨毯上には「翠簾屏風」と「料紙箱」が置かれ、画面右側に広げられているのが「大和錦」、手前の蓋の開いた桐箱に並んでいるのが紐で巻かれた「掛物」であろうか。ウィラード・ホテル宴会場に陳列された大統領への贈り物について、村垣日記に次の記述が見られる。

閏3月29日。薄曇。イギリスのミニストルきのうの答礼とて来りければ面会す。ベルギーのミニストルは名札ばかりおきて去りぬ。きょう大統領へ遣わさるる品々客舎に飾りつけて、目録をジュホントへ渡す。その品々は真の太刀一振・馬具一揃（蒔絵鞍鎧、紅厚ふさ）・掛物十幅（絹大堅物画様各種、極粉色、狩野・住吉の画家の筆なり）・翠簾屏風十雙・緞子堅物一對。ミニストル＝レウイス＝カスへ下されの品々、鞍鎧（胴に鳳凰蒔絵）に目録を添え、はた正興・おのれ・忠順より大統領へ贈る蒔絵火鉢三・同食籠一對ともに渡しける。とみに持行もせず、三、四日そのままかざりおきて、士官男女日毎に来りて、いと珍しがりて見物し、新聞紙屋はその品を写真鏡にかけ、新聞紙に出しなどして、後に大統領のかたへ送りしなり。かかる品々大統領の所持にはならず、その事どもを記録して、百物館に納むる事よし。すべて吏人へ贈りし品とて、大統領出して彼の館に納むる事とて、己がものにはならず。さればいかなる品もワイフ（妻女のことなり）へとて贈れば、我ものとなるよしなり。（村垣 120）

ウィラード・ホテルの部屋には、幕府の目録にある贈呈品だけでなく、村垣ら使節から大統領に贈られた「蒔絵火鉢三・同食籠一對」なども展示されていたことがわかる。国立自然史博物館所蔵の1860年由来「火桶」3個はこれにあたるのかもしれない¹⁰⁾。

また村垣の日記には「百物館」への言及があるが、一行はワシントン滞在中にスミソニアン協会理事ジョセフ・ヘンリーの案内で「百物館」を訪れている。実際には特許庁パテント・オフィスで美術品のほかに各国の日用品などを視察、中には日本の民具もあったという。万延元年使節団一行はスミソニアン協会を訪れた最初の日本人、そして博物館を見物した最初の日本人ということになるのかもしれない。

四月二日。快晴。パテント＝オヒース（百物館なるよし）といえる所に行きて見よ、と例の人々案内して、午後車に乗りて五六町も行けば高堂あり。柱・敷石ですべてマルメレン石（蠟石の如き石にて、白きは多し、ふのある石もみえけるなり）にて造りたる三階の堂内に入れば、ワシントンの独立戦争の図、はた写真の像などの大なる額あり。左右部屋部屋あり。この局の頭役の部屋に行きて挨拶して二階に登れば、両側、敷々の棚を玻璃の障子にて囲みたるが、三十間ばかりもあるべし。合衆国にて用いし蒸気機関車はじめ、種々奇巧の機関の雛形数百種あり。器物の農工、およそ日用各国の種類、わが国の農具、その他の品もあり。先年ミニストル＝ハルリスに贈りし時服はそのまま掛け

てあり。各国の条約まで納めたり。

(村垣 124)

5月25日(4月6日)に一行はブキャナン大統領の招きによりホワイトハウスで晩餐会に出席している。独身の大統領のために晩餐会のホステス役をつとめる姪のハリエット・レインを相手に戸惑いながらも、陳列されていた日本側の贈り物が話題になった模様である。

この度遣わされの品々、馬具をはじめかざりてあり、用い方など聞きたり。翠簾屏風はことさら珍重し、何をもて作りたる物ととう。竹をもて造りたりといえ、バンブー(竹の事なり)とてめでけり(竹はメリケンにはなし、西洋にもなきものという)。姪女三人へ帯地に羽二重など贈りければ悦びたり。やがてきょうの事ども厚く謝して旅舎に帰りぬ。
(村垣 129-30)

さらに6月2日(4月14日)には歓迎委員のポーターの案内で「スミスオニオといえる奇品はた究理の館」(村垣 133)すなわちスミソニアン協会を訪れて動物の剥製や人体標本などに度肝を抜かされているが、日記に日本産品への言及はない。一行はペリーやハリスの持ち帰った品々を目にして、いずれこの度の贈り物も博物館に納められることを予測したであろう。村垣が説明を受けたとおり、このときの大統領への贈り物の一部は、後にスミソニアン協会の国立自然史博物館に所蔵されることになった。現在同館で確認されているのは漆器の「書棚」「火桶」「蒔絵杓子」、それに「鞍」「馬具」「翠簾屏風」などであるが、村垣の日記にあった狩野派および住吉派の掛物十幅は含まれていない¹¹⁾。

こうして友信の描いた掛物絵の行方をワシントンのウィラード・ホテルまではたどることができたが、その後は所在不明である。格式を重んずる幕末の遣米使節は、オランダやイギリスに贈られたような最上等の金地屏風ではなく、若き奥絵師による掛物絵を持参した。大統領の「謁見」には狩衣姿で臨み、紅の紐のかかった黒塗の上箱から取り出した国書は、金泥花鳥を描いた料紙にしたためられていた。迎えるブキャナン大統領は威厳あるものの「黒ラシャの筒袖股引、何のかざりもなく、太刀もなし」(村垣 119)と軽装であるのにあきれながらも、贈り物が博物館に納められている様子を目にして、新しい国家のあり方を感じ取ったかもしれない。

5. おわりに

万延元年遣米使節の贈答品にはオランダ国王に贈られた六曲金地屏風ではなく、狩野友信のような若い奥絵師による掛物を選ばれた。新興国アメリカの大統領への贈り物の格は、オランダやイギリス国王へのものからは一段下がるものであった。それは幕府外交における国の格付けを反映しているのではないだろうか。そこにはまた急速に力を失いつつあった幕府の厳しい財政事情もあったものと思われる。残念ながら大統領に贈られた掛物絵の行方はわからないままである。

オランダ国王に贈られた友信の父、狩野董川中信筆「賀茂競馬図屏風」の落款は、狩野家の本姓「藤原」を名乗り、「式部卿」という官位が記されて「狩野式部卿法眼藤原中信筆」となっている。これは御用絵師の仕事の中でも「格別」の品、皇族や公家への贈答品に用いられる落款の書式であるという。幕末に英米に送られた15幅の掛物にはどのような落款があったのだろうか。現在確認されている友信の作品のうち、落款に「藤原」を名乗るのは前述の個人蔵「武者図屏風」(図1)左扇「藤原友信」、エルミタージュ美術館蔵「花鳥図」ならびに「生花図」の「春川藤原友信」、個人蔵「山水図」の「春川藤原友信」の4点である¹²⁾。明治維新により24歳で幕府御用絵師の地位を失った友信は法眼に叙せられることはなかったが、「藤原」の落款はその作品が奥絵師としての仕事であることを示唆するのかもしれない。エルミタージュ美術館所蔵品および個人蔵「山水図」については稿を改めたい。

注

- 1) 括弧内は旧暦による日付。
- 2) 東京藝術大学に残る履歴書に次の記載がある。
「舊幕本丸新築二付座敷向之内波之間竹之廊下客座敷柳間入側張付繪杉戸拾枚屏風五双掛物三幅被申付為賞大判三枚時服式重子給與別段骨折候二付大判式枚時服壹重子給與自今為手當壹ヶ年金五拾圓給與」
「和宮東京下向二付為待受屏風壹双掛物式幅申被付為賞時服壹重子銀子五十枚給與」
「舊幕西丸新築二付杉戸拾五枚小襖式通申被付為賞銀子百枚給與」
- 3) 二曲屏風 絹本着色 150.0 x 162.0 cm 左扇落款「藤原友信」印章「狩野春川」白文方印、右扇落款「一青斎友信」印章「狩野春川」白文方印。
- 4) 開成所とは幕府が1856年(安政3)に洋学研究教育機関として設立した蕃書調所が1863年(文久3)に改称されたもの。
- 5) 六曲一双 紙本着色 159.0 x 358.2cm 落款「狩野式部卿法眼藤原中信筆」印章「中信之印」朱文方印。
- 6) 東京藝術大学に残る履歴書に次の記載がある。「英米兩國工送付掛物繪十五幅申被付、為賞銀子五拾枚時服壹重子給與」
- 7) 『ホワイトハウス史』「ブキャナン大統領時代特集号」(第12号)のAllman記事に「蒔繪文机」(Table, Japan, c, 1854. Lacquered and gilded wood. 12 5/8 x 39 5/8 x 10 1/8 in., p.65)の写真が、またFinn記事に「違い棚」(Chigaidana shelf-cabinet, p.32)の写真が掲載されている。
- 8) 「是ハ内五幅極彩色五幅墨繪山水御繪様ハ御絵師にて取調相伺候様被仰渡仕立方之儀は繪表具眞草表具等取交是又美麗之方可然」
- 9) 「是ハ蒔繪書棚梨子地蒔繪料紙硯箱」
- 10) 『太陽』259号 特集「外交史を彩る贈答品」に「螺鈿のひしゃく」「蒔繪火桶」三点、翠簾屏風、馬具がカラー図版で紹介されている。
- 11) 国立自然史博物館(National Museum of Natural History)人類学部門(Department of Anthropology)オンライン・カタログには、1860年日本由来品として次の美術工芸品があげられている。書棚(Bookshelf Cabinet "Shodana")、火桶3点(Brazier (Hioke)、蒔繪杓子

(Lacquer Dipper “Shakushi”、鞍 (Saddle)、馬具一式 (Saddle/Bridle/Trappings)、翠簾屏風複数 (Screens “Suien”)。それ以外に養蜂器具 2 点 (Beehive/Box)、狩猟の様子を描いた挿絵 4 点 (Japanese Hunting Scenes Illustrations)、漁船模型 (Model of Fishing Boat) などの民俗学資料がある。

- 12) エルミターージュ美術館には狩野友信筆「花鳥図」掛幅・絹本着色 131.6 x 56.6cm、「生花図」掛幅・絹本着色 131.0 x 56.6cm とともに、ほぼ同寸の以下の絹本着色掛物絵が所蔵されている。狩野中信筆「禽鳥紅葉図」130.8 x 56.8cm、狩野房信筆「富士桜花図」131.4 x 56.5cm、住吉弘貫筆「鶉秋草図」131.5 x 56.7cm、板谷広長筆「紅葉観瀑図」131.4 x 56.7cm、狩野永信筆「飛泉桜花図」131.4 x 56.3cm、狩野永恵筆「雉子芍薬図」131.2 x 56.8cm、狩野勝玉筆「山水高土図」131.4 x 56.5cm。

参考文献

- Allman, William G. (2003). The White House collection from James Buchanan's time. *White House History*, 12, 65. Washington: White House Historical Association.
- The America-Japan Society. (Ed.). (1920). *The First Japanese embassy*. Tokyo: The America-Japan Society.
- 朝岡興禎 (1904). 『古画備考』全 4 巻 弘文館
- Finn, Dallas (2003). Guests of the nation: The Japanese delegation to the Buchanan White House. *White House History*, 12, 14-38.
- Houchins, Chang-su (1995). *Artifacts of diplomacy : Smithsonian collections from Commodore Matthew Perry's Japan expedition (1853-1854)*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- 維新史学会 (1974) 『幕末維新外交史料集成』第 4 巻 第一書房
- 河合正明 (1993) 「ライデン国立民俗学博物館所蔵の日本絵画について」『秘蔵日本美術大観 九 ライデン国立民俗学博物館』講談社
- 国際日本文化研究センター (1993) 『エルミターージュ美術館所蔵 日本美術品図録』国際日本文化研究センター 日文研叢書 2
- 河野元昭 (1993) 「富士巻狩図屏風」解説『秘蔵日本美術大観 九 ライデン国立民俗学博物館』講談社 p. 130
- 尾佐竹猛 (1999) 『幕末遣外使節物語』(講談社学芸文庫) 講談社
- 榊原悟 (1993) 「宇治製茶図屏風」解説『秘蔵日本美術大観 九 ライデン国立民俗学博物館』講談社 pp. 136-137
- 小学館編集部 (1986) 『長崎・出島展 : 築造 350 周年』小学館
- サントリー美術館 (2007) 『Biombo : 屏風 日本の美』日本経済新聞社
- 太陽編集部 (1983) 「大統領へのプレゼント」佐原真・チャンス・ハウチンズ取材協力『太陽』12 平凡社
- 武田恒夫 (1995) 『狩野派絵画史』吉川弘文館
- 村垣淡路守 (1969) 「米国に使節として一航海日記」高橋邦太郎編『近代日本の目覚め』筑摩書房
- フォーラー、マッティ (1993) 「ライデン国立民俗学博物館蔵日本美術の来歴」『秘蔵日本美術

大観 九 ライデン国立民俗学博物館』講談社

- 山田久美子（1999）「狩野友信—明治を生きた最後の奥絵師（1）—生い立ち・修行・奥絵師時代・作品」『LOTUS』19号 日本フェノロサ学会
- （2000）「狩野友信の明治—奥絵師から日本画教師へ」『近代画説』9号 明治美術学会
- （2002）「狩野友信—明治を生きた最後の奥絵師（2）—来日外国人画家との交友」『LOTUS』22号 日本フェノロサ学会
- （2008）「パリの欧文挿絵本」『ことばと人間』10号 立教大学言語人文紀要
- （2010）「シカゴ万博と鳳凰殿」『異文化コミュニケーション学部紀要 ことば・文化・コミュニケーション』2、133-144 立教大学

図版提供

- 図2 Paardenrace bij het Kamo heiligdom. Museum Volkenkunde, Leiden, RMV 4-30.
- 図3 Chigai-dana. Photograph by Bruce White for the White House Historical Association.
- 図4 Lacquered table. The White House Historical Association.



図1 狩野春川友信筆「武者図屏風」 個人蔵



図2 狩野董川中信筆「賀茂競馬図屏風」右隻 ライデン国立民俗学博物館蔵



図3 違い棚 ホワイトハウス蔵



図4 文机 ホワイトハウス蔵



図5 「ウィラード・ホテルに陳列された日本の贈り物」 アメリカ議会図書館蔵